

翻
訳Charlotte M. Brane 著『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』(翻訳・その 22)堀
啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十二回目となるこのたびは、第二十七章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続いて Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】(課題番号: 21K00290)による研究成果の一部である。

二十七章

レディー・ヘレナが何かちよつとしたことを言った時のことだった。アール卿は、「私は長すぎるほど家を離れて外国におりましたし、娘たちもさほど海は好きではないようで——ベアトリスに至っては嫌ってさえいるようです。ですから故郷のアールズコートに戻るの

が一番良いでしょう。大勢の人々で華やいだ場所というわけではありませんが、住むには楽しいと思いますよ。」と答えた。

「そうですね」と、レディー・ヘレナは言った。「我が家ほど愛する場所はありませんね。近隣の方々にもお返しをいかねばなりません。かつてはアールズコートが、楽しくすばらしいもてなしをする館として知れ渡っていたことを思い起こすと、私は恥ずかしい気持ちにさえなるのです。うちの娘たちも近隣の方々にご紹介せねばなりません。きっと楽しい冬になるでしょう。」

「夏と秋をやり過ごして」とロナルドは微笑んで続けた。「元気に冬を迎えましょう。母上、私がどなたをアールズコートにお招きするつもりなのか、おわかりでしょうね!」

「エアリー卿かしら?」

「そうです。」とロナルドは笑いながら答えた。「母上、私にとっても楽しいのです——彼の姿を見てその声を聴いていると、私もまた若やいだ幸せな気持ちに戻るのです。我々がここを離れると告げると、あのハンサムで誠実そうな彼の顔は曇りました。そしてロンドンが砂漠のようになってしまおうでしょう、とため息をつき——さりとて労働者であふれかえる、リントンにも帰ることができないと言いつけるのです。スコットランドも好きではなく、いくつもの地所を有している若い貴族が、あたかもホームレスになってしまおうかの様子でした。自身の混乱した話しぶりや失態に当惑していた彼が落ち着くのを待って、私は彼をアールズコートに誘いました。彼は、子どもたちの表現を真似るならば、「喜びで飛び上がらんばかり」でした。彼は一週間か十日ほどのうちには合流します。ライオネルも我々と一緒に来ます。」

「嬉しいですね」とレディー・アールは言った。「ロナルド、あなたに次いですが、私はライオネル・ダッカーを大切に思っています。彼の率直で、誇り高く、何事にも臆することない気質はとても魅力的に思えます。彼はちょうどベアトリスのようです。ベアトリスと同じように、彼は、まがった不正をどれほど嫌っていることでしょう！」

「そうですね」とロナルドは明るく言った。「私は娘たちを誇りに思っています。不誠実や偽りは欠片もありません。娘たちはうちの血統にふさわしい。ベアトリスは私の知る限り最も高貴な娘ですし、私は愛らしいリリアンも同じように愛しています。」

「もうあの子たちと別れたくはないでしょう？」と、レディー・アールは言った。

「自分の人生にもうすぐ別れを告げるようなものです！」と彼は応じた。「私はあまり強く感情を表さないたちですが、母上にも、私の人生がどれほどあの子たちの人生に深く結びついているのかは、ご想像できないでしょう。」

「では一言いわせてくださいね、ロナルド。」とこの母は言った。「ドラはあなたと同じようにとても強く深くあの子たちを愛しているのですよ。あの子たちを手放してあなたに預けるのはどんなに辛かったことか、少し思いやってくださいね。あなたの同意と許可のもと、近々あの子たちを彼女に会わせねばなりません。あなたが認めればあの子たちは母親に会いに行けるのです。」

「母上のおっしゃる通りです」と、少し経って彼は言った。「あの子たちはドラの娘であり、彼女はあの子たちに会わねばなりません。しかしあの子たちをあの農家に戻すことはできません——そんなことを考えるのは耐えられない。中間地点で——母上の家で、あるいは、そう、ロンドンで。そしてクリスマスにしましょう。」

「ロンドンにいる間が良いでしょう。」とレディー・ヘレナは言った。「私がドラに手紙を書きましょう。その時が来るまで、期待をしいくことで彼女は幸せな気分になるでしょう——あの子は、娘た

ちをととても愛していますからね。」

そして再び、ドラのぼんやりとした面影が、この夫の胸をよぎった。言うまでもなく、彼女は娘たちを愛していた。フィレンツェの、あの小さな家の面影がよみがえった。ドラがいつも座って、幼い娘たちをあやしていた、あの綺麗なブドウのつたで覆われた部屋の様子が、あたかも、彼が昨日までその家に住んでいたかのように、まざまざと眼前に浮かんだ。彼は、彼女の愛らしい忍耐強さや、決して失われることのなかった優しい愛情を思い出した。彼女から子供たちをとりあげ、あの悲しみに満ちた心をさらに傷つけるといふ彼の行いは、はたして正しかったのだろうか？あの、故郷を離れた寂しい数年の間、自分に注がれていた注意深い愛情と、彼女の耐え忍んでいた気苦労に対して、適正な、そしてふさわしい報いだったのだろうか。

彼には、彼女を鷹揚に許すこともできたはずだったが、そうはしえなかった。そして彼は再びひとりごちた。「死の訪れたときに！その時、私は彼女を許すだろう。」

灼熱の八月は、ロンドンではひどく暑く埃っぽい時期だが、アーلزコートでは夢のように美しい季節だった。背の高い木立のもとに大きな木陰広がり、暖かな陽光を遮った。広々とした畑に育った金色のトウモロコシは収穫を俟つばかりだった。生垣は花で埋め尽

くされ、大きな庭園のブナの木は青々と最高の姿を見せ、果樹園のフルーツは重げに熟れきっていた。もはや花であふれる春ではなく、すばらしく輝く夏を迎えていた。

何年もの間、アーلزコートがこんなに賑わったことはなかった。この地方の住人は、流行の最先端をいく知的な人々として知られていた。この館は、訪問客であふれた。エアリー卿はその筆頭だった。この大きな歴史ある館がいつの日か自分のものになることなどほとんど思いもよらず、ライオネル・ダッカーは生き生きと元氣な姿を見せていた。

長い間尽されなかったもてなしと楽しみを、近隣の人々は享受することになった。ベアトリスとリリアンはここでお披露目をせねばならなかった。レディー・ヘレナは、大勢を招いた夕食会とそれに続く舞踏会を最初に催すことに決めた。ロナルドは、ダンスには暑すぎるのではないかとコメントした。

「お父様、私たちはロンドンでも踊ったわ。」とベアトリスが言った。「その時はとても暑くて、部屋にあふれかえっている人たちが溶けてしまったとしても私は驚かなかったでしょう。ここなら場所もありますし——大きな涼しい部屋で、空気もきれいで、ロンドンと同じくらい大きな温室もありますもの。以前の経験に比べれば、何でもありませんわ。」

「ミス・アールのおっしゃる通りです。」とエアリー卿が言った。

「ロンドンでのシーズン中の舞踏会は苦行です。ここでなら、ただ楽しいだけです。」

「では舞踏会にしよう。」とアール卿が言った。「リリアン、招待客リストを作りなさい。そして主賓には、ホルタムホールのハリー卿とレディー・ローレンスのご夫妻を。それで思い出したのだが、ご夫妻のご長男のギヤスパーが昨日ドイツから帰国している。彼の名前も忘れないように。」

「あの幼かったギヤスパーが」とレディー・ヘレナが叫んだ——「戻ってきたのですね？是非とも会いたいわ。」

「あの幼かったギヤスパーは」とアアリー卿は笑いながら言った。「今では身長六フィートですよ、母上。どれほど時が経ったかお忘れですね。今ではライオネルよりも背が高く、立派なハンサムな青年ですよ。彼はなかなか魅力的な、掘り出し物と思えるような青年になりましたよ。」

アール卿は、話すのに夢中になっており、自分の言葉が引き起こした波紋に気づかなかった。エアリー卿は、そのハンサムで、こちらの情に訴えかけてきそうな、そして必ずドイツで教育を受けてくるといふその手のライバルの出現に、怯え、顔を引きつらせていた。

「イギリスの人々が、なぜご子息に外国で教育を受けさせようという思いに取りつかれるのか、私にはわかりませんね。」と彼はベア

トリスに言った——「それも世界の国々の中でも、とりわけドイツに。」

「どうしていけませんの？」と彼女は尋ねた。

「あの国の人々は恐ろしく感傷的です。」と彼は答えた。「髪を伸ばした、夢見るような瞳の男性に会えば必ずドイツ人だとわかります。」

「あなたはフェアではありませんわ。」とベアトリスは言うのと、彼の側を離れてリリアンの側に行った。

「あなたは嫉妬しているのですね。」と、この会話を側で聞いていたライオネルが言った。「そのリストから、あなたのライバルをお探しになれますように。」

「この退屈な舞踏会が終わつていればと思いますよ。」とエアリー卿はため息を吐いた。「この件の審議中には、私には物を言う機会も与えられないでしょう。」

だが彼はすぐに、この癪の種を忘れることになった。この毎りがたいギヤスパーはまさにその朝、姿を現し、彼がすぐにベアトリスの新参者にはまるで心を留めていないことも分かったからだ。じじつ、彼に温かい挨拶の言葉を少ししかけただけで、彼女はすぐに

この舞踏室に何の花が一番ふさわしいかという議論に戻ってしまったのだった。

「どうせ花を飾るなら」と彼女は尊大な調子で言った。「とても多くの花々を飾りましょうよ——観賞に値するような。この部屋のあちこちに“白い歩哨”のように活けてあるわずかばかりの色の薄い花ではなくてね。生き生きと香り高い花々でこの部屋をいっぱいにしましょう。リリアン、私が何を言っているかわかるでしょう。レディー・マントンの花々を覚えていてでしょう——あのすばらしい、色合いが幾重にも重なりあっていたような花々を。」

「舞踏会では、何でもあなたのお好きなようになさい、ベアトリス」とレディー・ヘレナは嬉しそうに微笑みながら言った。

「もし花が充分に足りなければ、ミス・アール」とエアリー卿は言った。「私の領地のリントンに使者を送ります。私の庭師は、自分がこの仕事の名人だと思っていますから。」

「まあ、エアリー卿」レディー・アールは言った。「私どもには大量の花がございますのよ。まだ温室にはいらしておりませんわね。温室にいらつしゃったらこの朝もあなたがた皆が楽しくお過ごしになれるでしょう。ベアトリス、どんなお花を選んでも、好きなように飾りなさい。」

「おわかりでしょう。」とこの美人は意気揚々として「意志を押し

通すことは何て大切なことでしょう！お父様が三十か四十くらいの植木鉢で充分だとお考えになっていたと想像してくださいな！お父様を驚かせましょう！もし、おばあ様が想像していらつしゃるよう、あの庭師が感情的になって反対したとしても、彼には花を準備してもらうことにしましょう。」

エアリー卿は、ベアトリスのこんな気風を何よりも愛していた。尊大で、小粋で、突然かすかな優しさのきらめきに溶け込むかと思えば、氷のような冷たさと陽光のように明るい笑いへと隠れてしまふのだった。美しく、まぶしく、気まぐれで、すぐに気が変わり、だが変わるたびに魅力的で、彼にとっては彼女の尊大な微笑みやわずかな言葉が、地上の何ものにも代えがたかった。

花々に囲まれてすごしたその朝を、彼は決して忘れなかった。彼には垣間見えた樂園だった。ベアトリスが、好きなように企もうとしている様子を、彼は楽しんだ。咲きほこつた花々に囲まれた彼女の表情はいつも以上に美しかった。

「あれは昼食を知らせる鐘ですね。」と、とうとう彼女は言った。「私たちはここに三時間近くもいたのですわ。」

「あなたに仕えるほとんどの者たちは少し困惑しているようですね。」とライオネルが言った。「哀れなドナルドは自分の育てた植物を思つて泣いていますよ。彼は私に、舞踏室の暑さに彼の花々は決して耐えられないとこつそりと話していました。」

「彼を慰める手立ては必ず考えますわ。」と彼女は応じた。「私は明るい花々の中で踊るのが好きなのです。そうできるのに、どうしても何ごとも楽しく、明るく、美しくしてはならないのでしょうか？」

「なぜ、そうしてはならないか、ですって？」と、ライオネルは重々しく言った。「ああ、ミス・アール、なぜ我々はずっと若く、美しく、幸せではられないのでしょうか？どうして花は枯れ、美は衰え、愛は古めくのでしょうか？哲学者にお尋ねください——私ではなく。私はその答えを知っていますが、他の誰かに答えさせてください。」

「今は哲学に興味はないのです。」と彼女は言った。「私は花と音楽とダンスの方が好きですわ。そして決してそれらに飽きることがないように願っています——ただもしも私が深刻になったり疲れ切ったりした時には——長く生きられないと思うでしょう。私の目がかすんだり、白髪になったりすることが、自分では想像できないのです。心臓が緩く脈打つことも想像できなければ、人生の温かさや美しさが冷たい退屈なものに変わってしまうことも実感できないのです。」

彼女がそう話している間にも、リリアンの優しい腕が彼女の体にまわされ、その美しいとやかな顔の、清らかな光にあふれた澄み切った瞳が彼女の目を覗き込み、柔らかな声が彼女に、花や音楽や人生や楽しいことや、そうしたものをはるかに超越した俗世離れし

た何かをささやき、その瞬間には、ベアトリスの誇り高い瞳も涙で曇った。

「リリー」と彼女は言った。「私はあなたほど善良ではないけれど、そうなるように努力するわね。まずは少しの間だけ、私に自分を楽しませて。」

彼女の雰囲気は変わり、エアリー卿はそれまで以上に彼女に魅了された。

「これこそ私が求めていた妻だ。」と、ライオネル・ダツカーはリリアンを眺めながら自分に言った。——「私を導き、教えを与えてくれる。ああ、もし女性たちが彼女らの使命を理解してさえくれたら！この少女は、想像するところの守護天使の姿のように見える——彼女が私のものになってくれるならば。」

エアリー卿はこれまで以上の愛を胸に、多くの花々とともに温室を離れた。

舞踏会が終わるまで待とう、と彼は自身に言った。そして彼はベアトリス・アールに妻になってほしいと求婚するのだ。もし拒まれたら、誰も彼のことを知らない遠くへと行ってしまうのだ。もし受け入れてもらえたら、彼女に尽くす奴隷となろう。彼女は女王となり。彼は彼女の騎士となろう。

ああ！もしそんな幸運が我が身のものとなれば、神にどのような
謝意で報いられたいのだろう。

（以下、次号）